

現代における寺院の社会的役割

岡崎 秀 磨

はじめに

人口減少社会^①・超高齢化社会を迎えた現代は、「人口増加期の社会において前提となっていたさまざまな制度や考え方、社会や家族の状況が成り立ちがなくなる時代^②」、「家族や地域共同体が変容している時代^③」である。二〇二五年には、約八〇〇万人いる団塊の世代が後期高齢者（七十五歳）となり、国民の四人に一人が後期高齢者となる。人口の年齢別比率の劇的な変化は、社会保障制度や医療・介護など様々な分野に影響を及ぼすことが避けられない。例えば、内閣府は人口急減・超高齢化が経済社会に及ぼす影響として、経済規模の縮小、基礎自治体の担い手の減少、東京圏の高齢化、社会保障制度と財政の持続可能性、理想の子ども数を持たない社会、を挙げている^④。

こうした日本社会の変化は、人口の都市圏への集中と、地方の人口密度の低下をともなうことで、自治体が消滅する可能性を高め、そうした「社会構造的な変化によって家族や地域社会に基盤をおく既成宗教が存続する条件^⑤」を厳しくし、「地方の宗教集団は、まさに今、「臨界点」にあり、現状維持できるぎりぎりの状態ではないか^⑥」とも

いわれるほど寺院（護持・管理運営）に深刻な影響をもたらしている。しかし、こうした状況の中で寺院は、

現代日本社会では、集団・組織はその存在意義を目に見える形で指し示すことが求められている。公共性、公益性にかかわる議論も活発である。学問・研究、企業など多くの社会集団や個人が社会に役に立つことを行うようにと期待され、公共性や公益性のある活動を行っていることを第三者が見てもわかるように明示しなくてはその存在意義が認められない。「宗教と社会貢献」という問題設定もまた、このような時代の流れの中で要請されてきたものであろう。⁽⁸⁾

家族や地域共同体が変容している時代だからこそ、地域に根ざし、人々の生老病死に寄り添うという公益性が仏教寺院に強く求められている。⁽⁹⁾

などと述べられるように、「公共性／公益性」という概念のもと日本社会・地域社会において何らかの役割が期待されるようにもなっている。その期待の背景には、約十八万も存在する宗教法人、コンビニエンスストアよりも寺院数が多い⁽¹⁰⁾といった事実、①一九九五年のオウム真理教地下鉄サリン事件をきっかけとした宗教法人法の改正、②二〇〇〇年代前半以降の公益法人制度改革の実施、③一九九八年以降の社会福祉基礎構造の改革、④二〇〇〇年代半ば以降の政府による「新しい公共」の提言といった社会状況⁽¹¹⁾、あるいは、

日本では戦後の高度経済成長によって社会福祉がアジアでは最も充実し、その結果として、宗教団体が社会支援や地域福祉から撤退して宗教活動に専念できる環境が継続されてきた。そのことは宗教団体が立派な外装をこらし、信者たちの満足感も大いに高める余裕を生んだが、同時に社会の公共的空間において役割を喪失する

過程、すなわち世俗化にもつながっていった。¹²⁾

と述べられるような宗教団体が過去担っていた公共的空間における活動、東日本大震災以降の宗教者・宗教団体による活動、

自分たちの時代のうちはまだ檀家制度が維持されて、なんとかなるだろうという楽観はなく、死者だけではなく、生きている人々、社会に向き合わなければいけない、この時代にこそ仏教を伝えなければという僧侶としての危機感と使命感が若手世代に共有され始めている。¹³⁾

と述べられるような「若手世代の持つ危機感」を背景とした活動といった宗教団体の活動実績への再注目といった様々な要因が考えられる。

こうした状況を受け、浄土真宗本願寺派では、例えば「近未来社会の危機―人口減少、超高齢化社会と宗教の役割―」をテーマとした第二回宗門教学会議¹⁴⁾(二〇一四年度)において、寺院・僧侶の役割として①「共助」の社会の形成、②新しいコミュニティにおける「ご縁」作り、③人がいなくなっていく地域のケア、④地域や公的支援が弱い中での子育て世代への負担軽減、を提示している。これらの提示の背景には、社会が直面する課題に対して寺院・僧侶の既存の活動を役立てることができるのではないかという視点がある。例えば上記④では、公的な、地域的な子育て支援が弱く、母親への負担が大きいという現状に対し、幼稚園・保育園の運営や日曜学校・育児支援という活動を行う寺院が貢献できる可能性があると指摘されている。既存の寺院・僧侶の活動の見直しと、その上で現代社会への適用・応用といった視点は、全国に存在する多様な寺院活動の再評価を促すことから重要であ

り、こうした中から現代における寺院の社会的役割も見出されてくると考えられる。

そこで本論では、宗教とソーシャル・キャピタルに関する研究を参照することで、寺院のどういった部分が現代において評価されているのかを確認する。その上で、ソーシャル・キャピタル研究における、

日本では、ソーシャル・キャピタルの源泉は何か、何がソーシャル・キャピタルを醸成するのかという研究において、ソーシャル・キャピタルを生かした事例そのものに現実味はあるものの、源泉を指し示す言葉が「ふるさと」「コミュニティのつながり」「社会力」といった抽象的な概念で表される傾向がある。¹⁵⁾

との指摘を意識し、寺院の社会的役割の源泉を「アジール」に求めることで、「現代における寺院の社会的役割」に対して一つの視点を提供することとしたい。

一・寺院の社会的役割はどこにあるのか

現代における寺院の社会的役割は、宗教法人の「公共性／公益性」に関わる。竹内喜生は、公益法人と宗教法人の比較を通して、

現代の公益とは、「国家に奉仕する」のではなく、「一般の不特定多数の人たちのニーズにこたえる」ことであり、「宗教は」精神的なニーズを満たしていく役割を果たす」と述べている。ここで触れられているニーズとは、公益と同様に時代的・社会的に変化するものである。公益は社会に役立つことであるならば、社会から要

請されていることに寄り添うこともまた公益であるといえよう。〈中略〉このように、宗教活動を社会のニーズにあわせるという、いわばチューニングの必要性の指摘は、時代やその状況に寄り添った活動が重要視されていることのあらわれである。¹⁶⁾

と述べ、一般の不特定多数の人たちのニーズに応えるところに宗教法人の公益性を認めている。ここで問題となるのは、地域社会（地縁）で、特定の「家」（血縁）との関係を主として活動（宗教的活動・社会的活動）を行ってきた寺院に対して、「無縁社会」とも評される現代においてどのようなニーズが存在するのか。あるいは、そもそもニーズに応える力が寺院にあるのか、といったことである。そこで、実際に寺院がどのような活動をしているのかなどを、近年の「宗教の社会貢献」「ソーシャル・キャピタル」に関する研究から確認する。

宗教の社会貢献には、①緊急災害時救援活動、②発展途上国支援活動、③人権・多文化共生・平和運動・宗教間対話、④環境問題への取り組み、⑤地域での奉仕活動、⑥医療・福祉活動、⑦教育・文化振興・人材育成、⑧宗教的儀礼・行為・救済¹⁷⁾といった分類がされるほど多様な活動がある。その中、近年活発であるのが二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災以降に注目された「寺院の避難所としての活用」である。震災に伴う大津波により、公的な避難所も多数被災し、一時は四十万人を超える避難者が臨時避難所等で過ごさざるをえなかったことから、震災後には災害対策基本法が一部改正され、自治体は指定避難所の見直しを行うなどの必要性が生じた。その際、「被災地では百以上の宗教施設が緊急避難所となった¹⁸⁾」こと、及び日本は自然災害の被害が大きいことを背景に、寺院をはじめとする宗教施設が自治体と災害協定を締結する動き¹⁹⁾が生まれたのである。

上記⑥医療・福祉活動の分野における寺院の可能性を指摘する研究も多い。四衢深・小林隆史・石井儀光・大澤義明は、寺院が所有する名簿（檀家名簿）や寺院立地などをもとに、地方の維持管理が困難となっている寺院が、

高齢化が進み社会ニーズの高い「見守りサービス」、自動車などによる移動革命を受けた「移動サービス」の拠点となりうることを示している²⁰⁾。また、Buddhist Social Responsibility (仏教者の社会的責任) という概念のもと寺院の社会参加のあり方を研究している大正大学地域構想研究所・BSR推進センターでは、超高齢社会・多死社会を迎える日本で、伝統仏教(僧侶・寺院)が地域の社会資源として、高齢者ケアに寄与する大きな役割を果たしているのではないかとこの仮説のもと、寺院での介護者カフェ、高齢者介護施設でのケアなどの研究を行っている²¹⁾。

医療・福祉分野における寺院の可能性は、「地方共生社会の実現」、あるいは「地域包括ケアシステム」といった行政が主導する政策に連携できる可能性を有していることは注目すべきである²²⁾。行政による「地方共生社会」提案の背景には、

我が国では、高齢化や人口減少が進み、地域・家庭・職場という人々の生活領域における支え合いの基盤が弱まってきています。暮らしにおける人と人とのつながりが弱まる中、これを再構築することで、人生における様々な困難に直面した場合でも、誰もが役割を持ち、お互いが配慮し存在を認め合い、そして時に支え合うことで、孤立せずにその人らしい生活を送ることができるような社会としていくことが求められています²³⁾。

と述べられるように、人口減少社会・超高齢化社会において人びとのつながりをいかに作っていくのかという老・病・死に直結する課題がある。そうした課題に寺院がいかに多様な人びと、団体等と連携できるかは、寺院の社会的役割において重要な課題の一つと理解することができようであろう。

二. なぜ寺院は社会的役割を果たせるのか

寺院では様々な活動がすでに展開されている。そして、そうした活動が現代社会において期待されてもいる。では、そうした期待は寺院のどこが評価されているのかといえ、寺院が潜在的に保持している「資源」「ネットワーク」を特定の範囲にとどめるのではなく、社会に開かれた形で生かすところに新たな役割を果たしていくことが期待されているといえる。例えば、寺院を含む宗教施設が避難所として利用できる理由として、

「資源力」(広い空間と畳などの被災者を受け入れる場と、備蓄米・食料・水といった物)があり、檀家、弟子、信者の「人的力」、そして、祈りの場として人々の心に安寧を与える「宗教力」⁽²⁵⁾

宗教施設のほとんどは、地域コミュニティと密接し、地域連帯の繋ぎ目の役割を果たしているため、災害時の避難所としての活用も十分に可能である。⁽²⁶⁾

と述べられることや、大正大学地域構想研究所・CIC推進センターは、伝統仏教が「地域包括ケアシステム」を担う可能性があると考え理由として、

寺院が地域に根ざした施設であること、また、僧侶は地域とのつながりを持つ人が多くいること、そして、人生の最後を迎えるにあたってスピリチュアルな問いに対応しうることなど⁽²⁷⁾

と述べられていることから理解できる。

宗教とソーシャル・キャピタル（社会関係資本）研究は、この寺院が潜在的に保持している「資源」「ネットワーク」を見出し、再評価している。ソーシャル・キャピタルとは、

「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」と定義した。つまり、人と人、人と社会との「つながり」や「絆」、そしてそれから生じる「信頼」や「お互いさま」「もちつもたれつ」といわれるような関係²⁸⁾

を意味し、「宗教は、社会関係資本を醸成する源泉として機能しうるのか。教会や寺院、神社などが地域社会における人びとの協調行動を促進させ、社会効率を改善することで、コミュニティ機能の創造と再生の役割を果たしているのか」といった意識から様々な事例研究が行われている。

例えば、猪瀬優理は、「つながりやネットワークを形成する拠点であり、人びとがそこから得られる利益を期待して、その形成・維持に経済的・社会的・心理的資源を投入する場」、すなわちソーシャル・キャピタルを形成し、蓄積する場（関係基盤）として寺院を捉えることを調査事例から提案している。猪瀬は、寺院が関係基盤として捉えることが可能である根拠として、①「〇〇寺の門信徒」といった共有属性がある、②住職など寺院の存在の維持に主たる責任を持つ存在がいる、③寺院における相互作用が活発である場合には、その維持への投資を行うことが促進されている、④過疎地域の寺院においては住職などの多くが何らかの形で地縁ネットワークと密接な関わりを持っている、ことを挙げている。また、浄土真宗本願寺派総合研究所も調査を実施し、「お寺を支える仕組み」として、①ご門徒の「うちのお寺」意識、②お寺と地域の「共にする」活動、③歴史の共有と継承力、④お寺を護持

する力、⑤「無自覚」の宗教性、を提示している³¹。こうした宗教とソーシャル・キャピタルに関する研究は、

寺院仏教を構成する地方の寺院では、住職・寺族ともに特段意識することもなく地域社会の人間関係を豊かにするさまざまな取り組みをしており、地域社会に寺院があること（Being）が地域の人々の安心感やコミュニティの連帯感に大きな影響を与えていることが確認された。もちろん、弱体化する家族や地域の連帯感をボランティア活動や傾聴活動によつて維持強化するにこしたことはない。しかし、寺院仏教の将来を展望するうえで、何かしら特別なことをしないとダメなのではないかという実践型の寺院（Doing）のみが注目される現況は見直されてしかるべきではないか³²。

と述べられるように、「地域社会に寺院が存在すること（Being）」で形成されてきた「資源」「ネットワーク」、加えて、地域コミュニティにおいて果たしてきた役割を再評価するものであり、「実践型の寺院（Doing）」のみが強調されることによる伝統的な活動の軽視や、寺院の規模や僧侶の活動の大小に議論が陥ることを避けることにもつながっている³³。

上記のように理解した上ででの問題は、「なぜ地域社会に寺院があること（Being）が地域の人々の安心感やコミュニティの連帯感に大きな影響」を与えることができたのか、である。興味深い研究として、ソーシャル・キャピタルが所得、幸福、健康などの様々なアウトカム（社会的・経済的成果）に与える影響を実証的に分析した伊藤高広・窪田康平・大竹文雄「寺院・地蔵・神社の社会・経済的帰結：ソーシャル・キャピタルを通じた所得・幸福度・健康への影響」³⁴（二〇一七年三月）がある。本研究では、小学生の頃の住居の近隣に神社・寺院・地蔵菩薩という日本の典型的な宗教関連建築の有無がソーシャル・キャピタルの操作変数として機能することを指摘すること

で、寺院や神社が近所にある地域で育った人は、そうでない人に比べて互恵性や幸福度が高いといった報告を行っている。この研究結果の理由について伊藤等は、神社は土地の守護神という性格を持ち、神道儀礼は地域住民の精神的連帯機能を、寺院は血縁を重視しながら死者ないし先祖の生と自己の現在の生のつながりを回想し、自覚する上で重要な役割を果たしていたという湯浅泰雄、山折哲雄の研究³⁵を根拠にしながら、特に寺院については次のように述べている。

寺院・地藏菩薩が子供の頃に近隣にあると、「どのような悪時も、天には必ず知られている」、「神様・仏様がいる」、「死語の世界（あるいは来世）の存在を信じる」というスピリチュアルな世界観をもつ傾向が高くなる。こうした世界観が、ソーシャル・キャピタルを高めている可能性がある³⁶。

こうした「地域に寺院や地藏菩薩があること」が人びとに与える意識を「無自覚の宗教性」と呼ぶのが稲葉圭信である。稲葉は、「無自覚の宗教性」を「無自覚に漠然と抱く自己を超えたものとのつながりの感覚と、先祖、神仏、世間に対して持つおかげ様の念」と定義し、「他者を思いやる利他主義／宗教的利他主義」とも繋がっていることを次のように指摘している。

畏敬の念、神仏のご加護で生かされているという感謝の念が、おかげ様という感覚が、人を謙虚にし、自分の命と同様に他者の命も尊重させる。「無自覚の宗教性」における「つながりの感覚」「おかげ様の念」が恩返しや感謝の心として思いやり行為の源泉ともなるのだ³⁷。

寺院が地域に存在することで「無自覚の宗教性」が醸成され、それがまた地域のネットワーク、幸福などに寄与するとすれば、次の問いは、では各寺院が保持する教えが「無自覚の宗教性」形成にどこまで関係があるのか。または、地域ネットワーク形成とどのような関係があるのか、であろう。しかし、この問いは、「無自覚の宗教性が醸成されるから教えがより理解できるのか、それとも逆か」「無自覚の宗教性があるからネットワークが構築されるのか、それとも逆か」といった、どちらが先かという議論に落ち込んでしまう可能性が高い。また、

宗教施設の存在が、ソーシャル・キャピタルに影響を与える一部は、その地域でコミュニティ活動が活発であったためであるという仮説と整合的である。⁽³⁸⁾

「つながり」がお寺を中心とするのではなく、ましてや教えが軸になっていないという現実だ。もちろん、宗教的なものも「つながり」の要素としてはたらいっていることを否定するものではないが、寺の実態は、「つながり」の上に存在していたと言うべきで、寺が「つながり」を中心的に創り出していたわけではない。⁽³⁹⁾

といった報告もなされている。

そこで、次のような問いを考えたい。ソーシャル・キャピタル研究によって指摘された寺院が潜在的に保持している「資源」「ネットワーク」が社会に開かれた形で生かされるとともに寺院の社会的役割が見出されている。しかも、そうして見出された社会的役割を果たすことが「公共性／公益性」に関わると理解することができる。では、果たして単に寺院の潜在的な「資源」「ネットワーク」を「一般の不特定多数の人たちのニーズにこたえる」形で開かれるものとするばいいだけなのか。もしそうであれば、「社会に求められるニーズにこたえるだけの寺院」

ではないのか。寺院の社会的役割には、寺院の側からする独自の意味づけが可能ではないのか。このような問いに對して、一つの手がかりをもたらずのが、

ほんの少し、世間から逃れるアジール（世俗の権力が及ばない聖域）を提供すること。社会規範や人間関係に疲弊した人が心身を解放できるアジールが、空間としての寺院であり、思想としての仏教なのだ。⁽⁴⁾
お寺というのは元々弱い人のための、いわゆるアジール（避難所）的な機能をもっている。⁽⁴⁾

と述べられている「アジール」という概念である。

三. アジールとしての寺院

アジールは、前近代社会において世界各地に見出される「世俗の権力から独立して、社会的な避難所としての特権を確保し、あるいは保証される場所」⁽⁴⁾のことである。寺院、教会、家、市場、山林、公道、墓地など「日常的にあちこちにあるあらゆるものがアジールになりうる」⁽⁴⁾といわれ、寺院は「敗戦した武士、借金返済の追求をうける庶民、主人からの解放を望む下人（奴隸）⁽⁴⁾」の避難所となったなどの豊富な事例がある。ここでは、「無縁」の原理の現れ方の一つがアジールであると述べた網野善彦『増補 無縁・公界・楽』（以下、頁数のみの表記は本書からの引用を表す⁽⁴⁾）を参照する。網野は、

「無縁」の原理は、未開、文明を問わず、世界の諸民族のすべてに共通して存在し、作用し続けてきた、と私

は考える（二四二頁）

といい、この「無縁」の原理が日本においては「仏教」と関連を持ち現実化したことを次のようにいう。

中世前期、「無縁」の原理は、場に即していえば、神仏の支配する地、「聖」なる場、「無主」の地として現れてくるのである。（一三五頁）

自覚化された「無縁」の原理は、さまざまな宗教として、組織的な思想の形成に向つての歩みを開始する。日本の場合でいえば、古代から中世前期までが、ほぼこの時期に当たるといつてよいであろう。「無縁」の原理は、仏陀の教えとしてとらえられ、天台・真言宗から鎌倉仏教にいたる仏教思想の深化が見出される一方、そこには未開の色彩がなお色濃く残る、さまざまな「無縁」の世界が錯綜して展開していた。（二四五頁）

また、「無縁」の原理が、「仏教」との関係を持ち現実化するに際しては、

人類の最も原始的な段階、野蠻の時代には、「無縁」の原理はなお潜在し、表面に現れない。自然にまだ全く圧倒され切っている人類の中には、まだ、「無縁」「無主」も、「有縁」「有主」も未分化なのである。この状況は「原無縁」とでもいうほかあるまい。

「無縁」の原理は、その自覚化の過程として、そこから自らを区別する形で現われる。おのずとそれは、「無縁」の対立物、「有縁」「有主」を一方の極にもつて登場するのである。（二四三頁）

と述べられるように、世間一般に存在する様々な関係性、その中でも「私的所有―有縁・有主⁽⁴⁶⁾」に対立するといふ。

網野の「無縁」の原理は、あらゆる人、物と関係を断絶した無関係を意味するのではなく、所有を基とした支配・被支配から離れていることを意味する。だからこそ、網野は、「無縁」の原理がはたらく場においては「本質的に世俗の権力や武力とは異質な「自由」と「平和」(七頁)が成り立つといい、アジールもまた法や権力の及ばない領域として存在していたのである。

以上から、アジールとしての寺院の特徴を三点取り上げる。第一に、寺院とは世間一般とは隔絶した価値観のもとで存在しているということ、より積極的にいえば、寺院の中に世間一般の価値観を持ち込めないということである。第二に、世間一般とは違う存在であったからこそ、

現実にはアジールの恩恵にあずかる人々は、飢えと暴力(国家の暴力、及び強者の私的暴力や自力救済)のために、死と隣り合わせの危険にさらされている民衆が圧倒的に多いことをはつきりと認識しておかなければならない。⁽⁴⁷⁾

と述べられるように、世間一般で「弱い立場」にさらされている人々のための存在となりえたということである。そして第三に、上記が成り立つ根拠こそ「神仏」であったということである。

アジールとしての寺院の具体的な活動については、女性が寺院に駆け込むことによつて離縁を実現できたという幕府公認の「縁切寺」、寺院への駆込行為(入寺)、不入権などが代表的である。入寺の機能・性格について佐藤孝之⁽⁴⁸⁾は、①謝罪・謹慎の意思表示としての入寺、②処罰・制裁としての入寺、③救済・調停手段としての入寺を指摘

し、不入権（外部権力の権力行使を拒否することができる」とされた権利）について網野は、

「無縁」の原理は、決して「保護」を求める消極的な意味でのみ主張されたわけではない。それは、潜在的ではあれ、寺域、あるいは神域に対する検断使の内部停止―寺内・社内検断権の承認、殺生禁断、伐木禁止の保証等の要求、「不入」の地であるとの主張の根拠となっているのである。（二〇六頁）

と述べている。「アジールには世間一般の法や権力が及ばない」ということは、ただ「自由」や「平和」が存在したわけではなく、世間一般の法や権力に対立するだけの「力」を持つ場合もあったということである。このアジールは、

一向一揆と寺内町に、「公界」「無縁」の原理が強靱な生命力をもって働いていたことは疑うべくもない。（百頁）⁽⁴⁹⁾

と述べられるように、単独の寺院に限定されず拡大していく場合もありながら、

戦国大名によるアジールの禁止は、寺院や僧侶の権威が乱用され、アジールへの駆込みが頻繁に行われることにより、大名の裁判権までが蹂躪されかねないことを防ぐ方に主眼があったように思われる。⁽⁵⁰⁾

といわれるように、近世に至るまで健在であったのである。

こうしたアジールとしての寺院は、

本末制と寺請制の確立を背景に、寺院はほとんどの町や村にも所在するようになり、およそ誰もが旦那寺をもった。寺院は人びとの信仰や生活との結びつきを強めていく。僧侶は人びとと関係を切り結ぶなかで、手習を指導するいわば町や村の教師としての役割も担ったのであった。^①

と述べられるように、江戸幕府の宗教統制として始まった寺檀制度の中で多様な役割を果たしていくこととなる。それは、アジールとしての寺院が「世間一般の法や権力」と直接的に対立するものではなく、「世間一般の法や権力」の範囲内に存在するものへと変化したともいえる。^②しかし、重要なことは、そうした変化の中で寺院に新たな機能・役割が加わったことである。例えば、大喜直彦は捨子に関する研究の中で、寺院の社会福祉的な機能を指摘している。^③大喜は、捨子の捨て場所の多くが路であることを指摘した上で、網野の研究によりながら、路を含め「捨て場所はほぼすべて境界の場、「無縁」の場」であったといい、その上で、捨子のその後に関する史料などから、

これらの資料からいえるのは、捨子が寺院関係者となる例が多い点である。このことは、当時寺院が社会福祉的な機能をしていたことを示している。

と述べている。

「世間から逃れるアジール（世俗の権力が及ばない聖域）」である寺院は、「世間一般の法や権力」に対する存在

としての社会的役割を果たしていた。時代が経る中で、「世間一般の法や権力」に対する力は様々な形で展開されてきたのである。こうした歴史を踏まえ、現代における寺院の社会的役割として何が指摘できるのかが次の課題である。

四、現代におけるアジールとしての寺院の社会的役割

アジールとしての寺院の歴史を踏まえ、現代におけるアジールとしての寺院の社会的役割として二点指摘したい。

第一に、「地域社会」に寺院があること (Being) の社会的役割とは、寺院が社会と隔絶した存在ではなく、社会の中で「アジールであろうとし続ける」ことに求められる。寺院は、仏の教えを保持することから成立する「無縁」の場・「アジール」としての機能をそれぞれに果たそうとしてきたところに、寺院活動の多様性の原因がある。

第二に、寺院がアジールとして機能する際には、「社会的弱者への視点」と「社会との対峙」が不可欠である。両者は、社会と対峙するために、社会の制度・価値観・常識からこぼれ落ちる人びと (社会的弱者) への視点を有する。社会的弱者への視点を有するために、社会的弱者を生み出すような社会へと対峙することが必要となる、といった関係で考える必要がある。こうした関係に示唆を与えるのが、金澤豊・真名子晃征による教誨師に関する研究である。彼らはソーシャル・キャピタルとしての教誨師という視点から次のように述べている。

ソーシャル・キャピタルとしての教誨師の最も大きな役割は「塀の中」である刑務所と、「塀の外」の社会をつなぐ架け橋となり、受刑者を外の社会へ導くことであろう。しかし、それと同時に教誨師は「塀の外」であ

る社会に対して、刑務所の実情を伝えていくことも重要な役割であるといえる。⁵⁴

金澤・真名子は、教誨師が「塀の外」と「塀の中」をつなぐ架け橋となりうるという根拠を、教誨師は受刑者と直接関係を持てることに求めているが、ここでは、「塀の中」「塀の外」、そして、「塀の中」は決して「社会の外」ではないのだ⁵⁵という言葉に注目したい。「社会」には幾つものコミュニティが存在するが、それらがすべて同列に並ぶことはありえず、優劣・格差などが存在してしまう。「社会の中」であるにもかかわらず「社会から隔絶された「塀の中」を「社会の外」として⁵⁶」見てしまうことがあるのである。だからこそ、「塀の中」から「塀の外」へと、「社会から隔絶されたところ」から「社会へ」とつないでいく必要がある⁵⁷のであり、それこそが「アジュール」としての機能の一つであったと考えたい。この点は、寺院・僧侶にとって大きな視点であるはずである。

現代においても、移民・路上生活者など暴力と餓死と隣り合わせの人々の増加は、深刻な世界的問題となりつつある。現代アジュールの最重要課題もここに⁵⁷ある。

と述べられるように、貧困は日本を含め世界的課題である。だからこそ寺院だけでなく政府、NPO団体などによって様々な取り組みが進められている。しかしながら、日本においては「自助（自分自身で身を守ること）」「共助（地域やコミュニティなどが協力して助け合うこと）」「公助（公的機関による援助）」とある中で、「公助」が縮小され、しかも「公助」と「自助」「共助」との間が大きく広がりつつある状態であり、「公助」へと至れない人が多くなっている。「公助」と「自助」「共助」はつながれなければならないのである。⁵⁸寺院の活動が「共助」であり、そこに「アジュール」としての機能を考えるのであれば、「公助」へとつながることに寺院の社会的役割の一つがある

と考えることができる。

こうした寺院のアジュールとしての役割を考える時、今後の課題として重要となるのは、「寺院」という建築物そのものの、視覚を含む感覚的な部分への再評価である。寺院を「アジュール」とした成り立たせる根拠は「神仏」であり、伊藤等が「仏教寺院や地蔵で特徴的なのは、本来目に見えないはずのホトケという存在を造形化した仏像が存在すること」⁽⁵⁹⁾を評価していたからである。この点に関して、例えば、

寺院の手習塾において、仏典を使つて教義や思想を教える仏教教育は行われずとも、そこに居る者に対して自ずとその寺院という空間が作用する仏教的影響は排されるものではない。空間を構成する要素は、鐘の音、香の臭い、読経の声などもあり、多様である。その全体が寺子に対し、陰に陽に与える影響の実際は測りようもないが、あるいは宗教的情操と呼んでよいような広義の人間形成作用に通じる契機が、手習という文字を学ぶ行為のそばで生じてたなら、この意味における仏教教育の可能性をまなざすことは、決して無意味な作業でなはずである。⁽⁶⁰⁾

と述べられるような「寺院」空間の意義を積極的に認める研究を今後注目していきたい。⁽⁶¹⁾

おわりに

現代における寺院の社会的役割は、様々な分野で求められている。しかしながら、寺院が既にもっている「資源」「ネットワーク」を社会の中で単に転用するところだけに社会的役割が認められるのだとしたら、人口減少社

会・超高齢化社会が進展するほどに、寺院の社会的役割は減少していくのではないかと考えられる。寺院が既にもっている「資源」「ネットワーク」が維持できず、崩壊し始めているのが、人口減少社会・超高齢化社会であると理解できるからである。そこで、「現代における寺院の社会的役割」を、「ソーシャル・キャピタルの源泉は何か」という問題意識から、「アジール」という概念にまで遡り、「寺院をアジールとして」現代社会へ生かしていく必要があるのではないかと述べたのが本論文である。

しかし本論文では、ソーシャル・キャピタル、アジール等の研究をつなぎ合わせることで論を展開しており、それぞれの研究意図・成果を誤読している可能性は大きく、本論文の説得力はそれほど期待できない。そのことを認めた上で、本論文が最も強調する点だけ示しておきたい。寺院における社会的役割に対して、

阿弥陀仏の本願のめあてとなつてゐるものは、煩惱に振り回されてゐるわたしではなかつたのかということに
 気づけるような場を提供する。そして、御同朋・御同行という意識を培つていくところに、本来の機能・目的
 があるといえるでしょう。⁽⁶²⁾

と述べられることがある。このことは、親鸞聖人の教えを受けるものにとつて間違いない主張である。しかしながら、仮に「御同朋・御同行」として親鸞聖人の教えを受けたものたちだけで隔絶された集団を形成するのであれば、それは「社会の中」にありながら実際には「社会の外」に閉じられた集団として位置づけられてしまう可能性があるのではないか。そうならないためには、「御同朋・御同行」という枠を拡大させていく方向か、「御同朋・御同行」が「社会の中」で開かれた集団として他者と交流し続けていく必要がある。これらはともに「伝道」に直結することであるが、後者の方向に一つの示唆を与えるのが「アジール」としての機能であると考えたい。加えるな

らば、社会の中でどのような集団としてあるのか、というのは親鸞聖人以後の人びとが直面する課題だったのではないかと考えている。網野とともにアジール研究者として著名な阿部謹也は、親鸞にみられる善・自力・追善供養・弟子・学問等の否定が徹底的なものであったからこそ、教えを受けた人々の間には新しい生き方が生まれたとして次のように述べている。

現世だけでなく、来世の運命に対する確信によつて裏付けあつたこれらの人々の集団は、わが国の集団の中で傑出した存在として、特に一向一揆や百姓一揆に際して大きな力を発揮することとなった。明治以降その特色は薄れつつあるが、わが国の歴史の中で門徒の集団がつくりあげた新しい人間関係のあり方には無視できないものがある。初期にはいわゆる「世間」に対して自分たちの講や組織を意識的に別個のものとしてつくりあげようとしていたのである。これはわが国の「世間」の歴史の中でまったく新しい出来事であつた。⁶⁸⁾

「現代における寺院の社会的役割」とは、「社会の中」でどう「アジール」であろうとし続けるのかと模索する営みの中で創造されてくると考えられるのではないか、ということの本論の一つの結論としたい。

【註】

- (1) 二〇二三年四月十二日、総務省は二〇二二年十月一日時点の人口推計を発表し、人口減少は十二年連続、前年比約五十五万人減、一九七二年の本土復帰以降はじめて沖縄県が人口減少などの人口減少・少子高齢化の実態が明らかとなった（産経新聞「過去最大の人口減 社会構造の変革議論せよ」二〇二三年四月十六日付）
- (2) 木越康（研究代表者）、東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤枝真、藤元雅文「地域社会と寺院の抱える問題点の研究―課題と分析視覚―」『真宗総合研究所紀要』三十五号、二〇一七年

- (3) 小谷みどり「寺院とのかかわり〜寺院の今日的役割とは」LifeDesign REPORT Autumn 二〇〇九年
- (4) 『選択する未来―人口推計から見えてくる未来像―選択する未来』委員会報告 解説・資料集』第二章 人口・経済・地域社会の将来像 (三) 人口急減・超高齢化の問題点
- (5) 国土審議会計画推進部会 国土の長期展望専門委員会「国土の長期展望」中間とりまとめ(二〇二〇年二月)、増田寛也十日本創成会議人口減少問題検討分科会「ストップ人口急減社会」(『中央公論』二〇一四年六月号)
- (6) 櫻井義秀「人口減少社会における心あり方と宗教の役割」『人口減少社会と宗教』法蔵館、二〇一六年
- (7) 川又俊則「人口減少時代と宗教」島菌進、末木文美士、大谷栄一、西村明編『模索する現代』春秋社、二〇二一年。ほか寺院の危機的状況については、鶴飼秀徳『寺院消滅』(日系BP社、二〇一五年)が事例を紹介している。
- (8) 猪瀬優里「関係基盤としての寺院―社会関係資本論の視点をどう活かすか―」『龍谷大学社会学部紀要』四十六号、二〇一五年
- (9) 小谷みどり「寺院とのかかわり〜寺院の今日的役割とは」
- (10) 文化庁『令和二年版 宗教年鑑』。寺院数は約七六、〇〇〇であり、一般社団法人日本フランチャイズチェーン協会によれば、二〇二三年四月時点で全国のコンビニエンスストアの店舗数は五五七五九。
- (11) 大谷栄一「なぜ、お寺が社会活動を行うのか?」大谷栄一編『ともに生きる仏教―お寺の社会活動最前線』(筑摩書房、二〇一九年) 二十八頁
- (12) 櫻井義秀『しあわせの宗教学―ウェルビーイング研究の視座から―』法蔵館、二〇一八年、四十一頁
- (13) 小川有閑「僧侶による『脱』社会活動―自死対策の現場から」西村明責任編集『いま宗教の向きあう二 隠される宗教、顕れる宗教 国内編Ⅱ』(岩波書店、二〇一八年) 二二六頁
- (14) 宗門教学会議とは、「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」に貢献する方途を模索するために、様々な分野で活躍する有識者を招聘し現代社会の諸課題をテーマとして議論を行う会議である。これまでの宗門教学会議については、浄土真宗本願寺派総合研究所HP (<http://j.soken.jp/download/8680>)にて報告記事の閲覧・ダウンロードが可能。
- (15) 櫻井義秀「人口減少社会における心あり方と宗教の役割」
- (16) 「宗教法人の公益性―二つの法人制度の比較から」西村明責任編集『いま宗教に向き合う二 隠される宗教、顕れる宗教 国内編Ⅱ』岩波書店、二〇一八年、一五七―一五八頁
- (17) 稲葉圭信「宗教の社会貢献―宗教的利他主義の実践と共生社会の模索」池澤優編『政治化する宗教、宗教化する政治』世界編Ⅱ』岩波書店、二〇一八年。なお稲葉は、「宗教の社会貢献」を「宗教者、宗教団体、あるいは宗教と関連する文化や思想などが、社

- 会のさまざまな領域における問題の解決に寄与したり、人々の生活の質の維持・向上に寄与したりすること」と定義している。
- (18) 稲葉圭信「コラム⑤宗教の災害への対応」(島蘭進、末木文美士、大谷栄一、西村明編『近代日本宗教史 第六巻 模索する現代』春秋社、二〇二一年)。また、大窪健之、林倫子、伊津野和行、深川良一、里深良一、建山和由、酒匂一成、大岡優「東日本大震災における地域文化遺産の避難所としての活用実態」(『歴史都市防災論文集』五巻、二〇一一年)では、寺院の避難所としての事例を紹介し、寺院の防災拠点としての展望を述べている。なお、安藤徳明(『東日本大震災における寺院の避難所開設要因の定量的分析』『宗教と社会貢献』六巻一、二〇一六年)は、寺社が避難所となった最も重要な要因は、「行政からの避難指定所を受けているかどうか」という寺院属性の中で「唯一行政が操作可能なもの」であると指摘している。
- (19) 災害時における寺院を含む宗教者、宗教団体の活動が東日本大震災以前に存在しなかったわけではない(大村英昭、家本博一、宮田幸一「特集 いま、宗教の社会的役割を問う」『東洋学術研究』三十四巻一、一九九五年)が、その違いについては「阪神・淡路大震災では宗教者がいわば素性を隠してひっそりと支援活動を行なったのに対して、東日本大震災では、宗教者が堂々と連携し、長期にわたって被災者に寄り添った」(高橋原「大震災後の宗教者による社会貢献と「心のケア」の誕生」西村明責任編集『いま宗教に向き合う』一 隠される宗教、顕れる宗教 国内編Ⅱ 岩波書店、二〇一八年、一一三頁)という指摘がある。なお、全国の避難所、宗教施設を集積した日本最大級の災害救援・防災マップとして、未来共生災害救援マップ (<http://reliefmap.osaka-u.ac.jp/map/>) があ²⁰。
- (20) 「地方において寺院は見守り・移動サービス拠点となりうるか」『都市計画論文集』vol.五十四、No.三、二〇一九年
- (21) 科学研究費助成事業 挑戦的研究(開拓)「超高齢・多死社会への新しいケア・アプローチ：地域包括ケアにおけるFBOの役割」研究成果報告書『超高齢社会における寺院・僧侶の可能性』(二〇二三年三月)。また、BSR推進センターでは、寺院への新型コロナウイルス感染症の影響を継続的な調査と報告を行っている(https://chikouken.org/activity/activity_cant6/)
- (22) それぞれの地域の実情に合った医療・介護・予防・住まう・生活支援が確保される体制を構築する²¹。厚生省HP (https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaiho/kaiho_koureisha/chiki-houkatsu/) 参照
- (23) 川又俊則「老いを生きる人びとの信仰―高齢者福祉施設と地域包括ケアシステムに注目して―」(『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編』五号、二〇二二年)、奈良修三「社会資源としての地域寺院の福祉的活用」(『福祉社会開発研究』十六号、二〇二一年)など
- (24) 厚生労働省HP (<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184346.html>)
- (25) 稲葉圭信「コラム⑤宗教の災害への対応」

- (26) 沈一撃・稲葉圭信「都市部宗教施設の避難所活用は可能なのか―施設の災害対応力と減災への取組に注目する―」『災害と共生』四巻二号、二〇二二年
- (27) 『超高齢社会における寺院・僧侶の可能性』
- (28) 菊川一道「『お寺』と地域の公共性―なぜ、寺は潰れないのか?―」小林正弥監修 藤丸智雄編『本願寺白熱教室』法蔵館、二〇一五年、二〇一頁
- (29) 「寺院と公共性」浄土真宗とソーシャル・キャピタル(社会関係資本)、『宗報』二〇一三年八月号。「宗教がソーシャル・キャピタルを醸成し、人びとの関係性を取り戻すこと、信頼感の回復や互恵性の情勢に役立つことを現実態として分析し、説明するだけではなく、可能態としての論議も行ってよいのではないかと思う」(櫻井義秀「ソーシャル・キャピタル論の射程と宗教」『宗教と社会貢献』一卷一号、二〇一二年)
- (30) 猪瀬優里「関係基盤としての寺院―社会関係資本論の視点をどう活かすか―」。ほかに、「寺院がつくる地域―仏教婦人会の活動を中心に―」(『宗教研究』八十八巻別冊、二〇一五年)がある。
- (31) 「寺院と公共性」お寺を支える仕組み』『宗報』二〇一五年三月号
- (32) 櫻井義秀・川又俊則編『人口減少社会と寺院―ソーシャル・キャピタルの視座から』法蔵館、二〇一六年、四二二頁
- (33) 「発信力を持つ僧侶の活動は、発信力を持たない僧侶にとつては、我が事とはならず、「あれは特別な人がやれることで、うちでは無理」という他人事のままとなってしまうかねない」(小川有閑「地域における寺院の社会的責任―月刊『地域寺院』を資料として―」『地域構想』一号、二〇一九年)
- (34) 本論文は大阪大学大竹文雄のホームページ(<https://www2.econ.osaka-u.ac.jp/~ohake/index.htm>)よりダウンロードできる。なお、本研究をもとに、産経新聞では「神社仏閣の近くで育つ」と「幸せ」感じやすい 大阪大教授らが分析(二〇一七年五月十四日付)と報道された。
- (35) 湯浅泰雄『日本人の宗教意識』(講談社学術文庫、一九九九年)、山折哲雄『神と仏 日本人の宗教観』(講談社現代新書、一九八三年)
- (36) 伊藤等は、「寺院・地蔵菩薩」としているが、ウィリアム・R・ラフルアが「地蔵は〈救う者であると同時に救われる者〉を著しており、中絶であれ他のことであれ、何らかの「間違いを犯した」親たちの祈りと謝罪の両方を受けとるのである」(『水子〈中絶〉をめぐる日本文化の底流』青木書店、二〇〇六年、六十六頁)と指摘しているように、地蔵菩薩は寺院とは異なる役割が担わされてきているともいえ、両者を分けて論じる必要性もあるといえるが、こうした点については今後の課題としたい。

- (37) 稲葉圭信「無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル」『宗教と社会貢献』一卷二号、二〇一一年
- (38) 伊藤高広・窪田康平・大竹文雄「寺院・地蔵・神社の社会・経済的帰結…ソーシャル・キャピタルを通じた所得・幸福度・健康への影響」
- (39) 菊川一道「『お寺』と地域の公共性—なぜ、寺は潰れないのか?」小林正弥監修 藤丸智雄編『本願寺白熱教室』一九九頁
- (40) 小川有閑「僧侶による『脱』社会活動—自死対策の現場から」
- (41) 大菅俊幸編 島園進、川又俊則、前田伸子著『仏教の底力 現代に求められる社会的役割』明石書店、二〇二〇年、一二三頁
- (42) 『日本民族大辞典』上巻、二十頁
- (43) 伊藤正敏『アジールと国家』(筑摩書房、二〇二〇年)三十頁。なお、寺院、教会などのアジールを「空間的アジール」とし、その他に「人的アジール」「時間的アジール」が分けられることがある。
- (44) 神田千里『宗教で読む戦国時代』(講談社、二〇一〇年)一二六頁
- (45) 『増補 無縁・公界・衆』平凡社ライブラリー、一九九六年
- (46) 「有主・有縁—私的所有が、無主・無縁の原理—無所有に支えられ、それを媒介としてはじめて可能になるという事実」(『増補 無縁・公界・衆』二二二頁)、「戦国時代」「無縁」「公界」「衆」という言葉でその性格を規定された、場、あるいは人(集団)の根本的な特質は、これまでくり返しのべてきたように、主従関係、親族関係等々の世俗の縁と切れている点にある」(『増補 無縁・公界・衆』一一〇頁)。
- (47) 伊藤正敏『アジールと国家』一二二頁
- (48) 『駆込寺と村社会』吉川弘文館、二〇〇六年
- (49) 大喜直彦は、「室町期以降、都市の経済力の展開とともに、捨子も生存できる条件が生まれ、やがて近世に入り「町」として捨子問題に対処する制度が成立していくのであろう」(『中世びとの信仰社会史』法蔵館、二〇一一年二二二頁)と述べ、その寺内町において捨子養子制度が成り立っていたことを林宏俊「近世京都における寺院町の運営と捨子」(『奈良史学』三十号、二〇一三年)が指摘している。
- (50) 神田千里『宗教で読む戦国時代』一四七頁
- (51) 梶井一暁「文字学習の場としての近世寺院に関する一考察」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』一六六号、二〇一七年
- (52) この点を伊藤正敏『アジールと国家』では、「絶対的アジール」「相対的アジール」として説明している。
- (53) 『中世びとの信仰社会史』第二章 子どもと神仏—捨子、境界の子—

- (54) 金澤豊・真名子晃征「教誨師と更生活動」葛西賢太・板井正斉編叢書『宗教とソーシャル・キャピタル』ケアとしての宗教』明石書店、二〇一三年、六十六頁
- (55) 宗教とソーシャル・キャピタル『ケアとしての宗教』七十頁
- (56) 宗教とソーシャル・キャピタル『ケアとしての宗教』七十頁
- (57) 伊藤正敏『アジュールと国家』二四六頁
- (58) 「貧困と社会福祉制度」『宗報』二〇二二年三月号
- (59) 伊藤高広・窪田康平・大竹文雄「寺院・地蔵・神社の社会・経済的帰結…ソーシャル・キャピタルを通じた所得・幸福度・健康への影響」
- (60) 梶井一暁「文字学習の場としての近世寺院に関する一考察」。この点は、「誰一人取り残さないー本願寺派×SDGsー」をテーマとした第六回宗門教学会議（二〇一七年度）において、有識者として登壇された水谷修氏が紹介された、不登校・引きこもりの子どもが寺院や宗教施設で生活すると、学校への戻りが早くなったり、リストカットができないといった事例との関わりが考えられ興味深い。
- (61) 近年話題となることもある寺院葬に関して、佐々木健、戸田千春「寺院と本堂の利用の実態 国指定文化財を除く寺院本堂を対象として」『日本建築学会技術報告書』（二十七巻六十七号、二〇二二年）には、「本堂葬儀を選択することで本堂の利用や寺院の来訪機会を増やす事例もみられる」とある。
- (62) 佐々木義英「論点 浄土真宗の経糸と横糸―災禍にあつて僧侶に求められているもの―」『浄土真宗総合研究』十六号、二〇二二年
- (63) 『世間』とは何か』講談社現代新書、一九九五年、一一四頁。なお、『日本人の歴史意識―「世間」という視覚から―』（岩波新書、二〇〇四年、六十一―六十二頁）では、「彼らは魔界や怨霊を信することなく、独自の形で合理的生活様式を作り上げた。その意味で日本の怨霊信仰に決定的な一撃を与えたのである。彼らも後にはそれなりの「世間」を作ってゆくことになるが、初期にはいわゆる「世間」に対して自分たちの講や組織を意識的に別個の存在として作り上げようとしていたのである。これは日本の「世間」の歴史の中で全く新しい出来事であった。真宗教団史がこのような視点から新たに描かれてゆく必要があると私は考えている」と述べている。阿部が指摘する「講」とは、中世以降、念仏を喜ぶ人びとの集まりから自然発生的に生まれたものとされ、その役割については、「講」という歴史を持つ関係が、住民の集落への愛着、お寺への愛着となり、さらに、そこで生まれた人間関係が福祉的な活動へとつながり、住みやすい田舎作りにもなっている」「お寺が地域の歴史を保っており、その歴史が共有さ

れることよって地域への愛着となり、人びとのつながりが生まれ、相互扶助の活動にもなっているのだ」といったものがある（寺院と公共性 お寺を支える仕組み③人々が回帰するまちづくり―歴史の共有と継承力―『宗報』二〇一五年五月号）。